

『邪馬台三国志』 邪馬台国の国々など解説編 概要

の説の下で、「記紀」などの資料、「倭人伝」など中国史書、伝承、神社の縁起、地名の由来、考古学成果、中国・インド・西アジアの歴史・宗教・習俗等々に基づきながら、古代史の謎を総体的に検証して解明し、それをつなぎ合わせて長編の歴史物語に組み上げました。同時に、そのつど謎を検証できるように綴りました。言わば、量子物理学の解法である帰納法にならない、大系的かつ長編の歴史物語を通して自説の立証を試みた次第です。

高田康利

上古から大和朝廷成立までの歴史物語を綴りました。大陸の古い歴史を背負ってきた渡来人たちが築きあげた歴史は、神仙の国(神国)・蓬萊郷づくりなど魂の再来、水田稲作、古の善政再現、孫子の「戦わずして勝つ」の実現にしのぎを削った歴史でもありました。

編 解説編 概要

その間の前五世紀から倭国大乱まで、那珂つ国と天之国、オロチ敵之国、倭国、豊葦原中つ国、伊都国、倭奴国、邪馬台国の王朝が立て続けに興りました。大乱後は、南九州に逃れた倭奴国末裔が邪馬台国と覇権を争った末に、晴れて倭国や倭奴国の再興を成し遂げ、大和朝廷を打ち立てたのです。

それらが複雑に織り重なって流転する様子は、中国の「三国志」をはるかに凌駕して、世界中に誇れる歴史だったので、大和朝廷や「記紀」の編纂者らは、

『邪馬台三国志』

邪馬台国 神武—崇神—応神とあるべき王系譜に、神武—崇神の間に大倭(大日本)家八代(綏靖く開化)を挟み、崇神—応神の間に垂仁・景行・成務・仲哀の邪馬台国王四代を割り込ませて、万世一系に創り変えたのです。本書の王系譜は、「記紀」の随所に潜んでいる矛盾や改ざんを洗いざらい探し出して、本来あるべき姿に正したもので、国宝に指定された海部氏系図と合致します。本書は、その解説編です。